（別紙　2）

論文審査の結果の要旨

論文題目　　春秋時代の盟誓に関する基礎的研究

氏　　名　　呂　　静

春秋時代にいたるまでの中国は、都市と農村がまとまって「国」をつくり、その「国」が大国によってまとまりを見せていた。春秋時代中期ごろからしだいに「国」が地方と中央をむすびつける県に再編され、それをまとめる中央が、あちこちにできあがる過程で、社会が大きく変動したことが議論されている。

本論文が扱う盟誓は、「国」が大国によってまとまりを見せていた時代にあって、しかも漢字が各「国」に根付いた後、「国」どうしや「国」の内部におけるとりきめを問題にする。

漢字が殷において独占的に用いられていた時の「祭」と釈される字が、周を経て春秋時代の「載」の字になり、とりきめの証たる「載書」（盟誓の誓約書）という言葉を生み出したことに関する考証はは、特に評価された。「載書」は「国」が違えば「盟書」ともいう。この「盟」について殷の血祭り由来するという指摘も、興味深いが、これについては、漢代の「明器」（副葬品）の「明」の用例なども加えた検討が必要であろう。

以上のことを確認した上で、『左伝』に見える盟誓を具体的に検討しなおした部分も本論文の意義を高めている。

一部推論のいきすぎや言葉の不適切な使い方を指摘された箇所もないではないが、限られた史料事情のした、中国古代史研究を新たな段階に進めた点は、高く評価できる。よって、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。